

梅雨に入りいよいよ雨の季節がやってきましたが、雨の降り始める前に、風に乗ってやってくる独特のにおいを感じたことはないでしょうか。

実はこれ、もちろん雨そのものにおいではなく、湿度の増加や雨そのものに伴って発生した、土中の化学物質のにおいなのです。

その正体は、ペトリコールとゲオスミンという物質で、ペトリコールはギリシャ語で「石のエッセンス」を意味します。普段晴れている時に特定の植物が土壌に発した油分が、雨が降る前に湿度が高くなると土壌から放出され、独特なにおいを発するものです。

降り続く雨によって油分は流されてしまいますので、正確にいうと風によって運ばれてくる「雨が降りそうなにおい」といえます。

ゲオスミンは同じく「大地のにおい」という意味で、土中のバクテリアが作り出し、カビ臭さや泥臭さのように感じるのが特徴です。雨水によって土中から拡散しますので、降った雨水が蒸発し始める際に匂いが強まることから「雨上がりのにおい」ともいえます。

また、雨がらみのにおいという事では、まれに雷によって地上付近で発生するオゾンも、漂白剤のような独特な刺激臭を発生させることが知られています。

びろうな話ですが、平安朝の昔、雨のにおいは龍のゲップのにおいといわれていたそうです。竜巻や雨乞いなどで雨と関わりの深い龍を、その独特な匂いの発生源と考えたのかもしれませんが。

近年まち中では、表土はアスファルトで覆われ、土の広がる光景は少なくなってきましたが、それでも郊外を中心にいたるところに土は残っています。

におい物質の揮発量は、気温の上昇とともに増しますし、湿度の増加はにおいを感じやすくさせます。梅雨が明けたのち盛夏となれば、気温・湿度とも上昇し、夕立ちなどにわか雨が多くなってきますから、強い日射で乾いた土から発する雨のにおいを嗅ぐ機会も増えることでしょう。

